

か。彼は、父アサの時代にまだ残っていた神殿男娼をこの国から除き去った」南王国ユダの王ヨシャパテは北王国イスラエルの王アハブや息子アハズヤと友好関係を保っていました。彼の業績については、年代記の書に記されているとありますが、それは歴史誌のことで、そこにより詳しく彼の歩みについて記されています。彼が行ったことの中では、カナンのはバアルに影響されて行われていた神殿男娼という悪習を除き去ったことがありました。

②ヨシャパテの船団 (47~49)「そのころ、エドムには王がなく、守護が王であった。ヨシャパテはタルシシュの船団をつくり、金を得るためにオフィルへ行こうとしたが、行けなかった。船団がエツヨン・ゲベルで難破したからである。そのとき、アハブの子アハズヤはヨシャパテに、『私の家来をあなたの家来といっしょに船で行かせましょう。』と言ったが、ヨシャパテは承知しなかった。」エドムは死海の南東に位置していて、ヤコブの兄弟エサウの子孫の民でした。王はおらず、守護が政治を担っていました。ヨシャパテはタルシシュ(スペイン)製の船を数艘造って、金の獲得のために、アラビアのオフィルに行こうとしました。しかし、アラバ湾の北端のエツヨン・ゲベルあたりで船団が難破してそれは果たせませんでした。その時に、アハブの子アハズヤが援助協力を申し出たのですが、ヨシャパテはそれを受け入れませんでした。

③ヨシャパテの葬り (50)「ヨシャパテは彼の先祖たちとともに眠り、先祖たちとともに父ダビデの町に葬られた。その子ヨラムが代わって王となった。」そのヨシャパテもその一生を終え、ダビデの町(ベツレヘム)に葬られました。

3. アハズヤの生涯 (51~53 節)

①アハズヤ王 (51)「アハブの子アハズヤは、ユダの王ヨシャパテの第十七年にサマリヤでイスラエルの王となり、二年間、イスラエルの王であった。」はからずも学んでできたアハブ王の生涯は、主に立ち返って進むことを期待されてきたにもかかわらず、結局は残念なものでした。その子アハズヤについては前段で出てきましたが、南王国ユダのヨシャパテ王の第17年にサマリヤを拠点とする北王国イスラエルの王となりました。在位は二年ですから比較的短かったです。

②父に習い (52)「彼は主の目の前に悪を行い、彼の父の道と彼の母の道、それに、イスラエルに罪を犯させたネバテの子ヤロブアムの道に歩んだ。」アハズヤは主なる神に不忠実でした。それは父アハブとフェニキヤ出身の妻イゼベルが歩んだ道を踏襲したのです。その根っこはヤロブアム一世にありました。ヤロブアムはソロモンに取り立てられたのですが、神の民の王として不信仰の道の始めであったともいえる人でした。

③バアルに仕え (53)「すなわち、彼はバアルに仕え、それを拝み、彼の

父が行ったと全く同じように行って、イスラエルの神、主の怒りを引き起こした。」アハズヤは偶像神バアル信仰によって、政治を行いました。彼は父アハブが行ってきたように行ったのです。それはイスラエルの神である主の怒りを買うものでした。

《結論》

神の民には、時代の変遷のなかに、預言者、大祭司とともに王が立てられ、三者がそれぞれの役割を果たすようになっていました。その体制で神の民がふさわしく整えられていくことが期待されたのでした。三者のうちの王は、国を政治的に整えることが求められていました。しかし、他の国と違うのは、その国の王は主への信仰に基づいて政治を行うことが至上命令であったといっても良いのです。

そのあり方は元を正せば、アブラハムにあったということができません。すなわち、主はアブラハムに「あなたは、あなたの生まれ故郷、あなたの父の家を出て、わたしが示す地に行きなさい。そうすれば、わたしはあなたを大いなる国民とし、あなたを祝福し、あなたの名を大いなるものとしよう。」(創世記 12:1~2)と言われて、この民の歩みは始まったのです。アブラハム、イサク、ヤコブの神は、モーセの時代に出エジプトを成し遂げさせてください、荒野に置かれた時代に律法を与えられました。それは神の民の信仰の礎でもありました。ヨシュアの時代に約束の地に戻された民は12部族となっていました。それぞれの部族に土地が与えられました。士師の時代を経て、預言者サムエルの時代に民は王を求め、立てられたのがサウル王でした。彼は不信仰に陥り、ダビデが王として立てられます。ダビデには失敗もありましたが、一貫として信仰に生きました。その子ソロモンも信仰を大切にしましたが、この民のほころびのはじめがこのソロモンにあったといえるかもしれません。

ソロモン後の時代になって、王国は北王国イスラエルと南王国ユダへと分裂してしまいます。最後のページの図にもあるように、南王国の方はその信仰はレハブアムに始まり、今朝の記事に出てきたアサ、ヨシャパテと守られていましたが、ヤロブアムに始まる北王国イスラエルの王たちは、不信仰の王が連なり、見てきたようにアハブ王はバアル信仰にうつつを抜かし、それはその子アハズヤにも継承されていったのでした。

信仰の継承はどの時代にあっても重要です。私たちも、次の世代に信仰を繋いでいくことが大きな課題です。そのためにも、先週おこなわれた教会信徒総会資料でも確認したように、三位一体の神が啓示してくださった聖書に基づき、その根幹にある福音信仰をしっかりと携えていくことが大切です。そして、その福音を宣教し、次の世代にバトンタッチしていくこと求められているのです。少子高齢化の時代になって、キリスト教会の次の世代への継承には、熱い

祈りが必要です。覚えるべきことは、今朝の学びにもあったように、信仰内容に混ぜ物をしていくと、次第にその信仰の方向がずれていってしまうということです。ヨシヤパテが宗教改革が用いられたように、私たちが絶えず聖書にもどりながら、福音の原点に立たなくてはなりません。この福音が横に広がっていくと同時に、次世代にも継承されていきますように。姉ヶ崎キリスト教会の働きにも主がますます恵みが注いでくださるよう心合わせて祈っていきましょう。